The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	女たちのフィリピン : 1980年代日本の女性グループ「カラヤアン関西」をめぐる一考察
Author(s)	中西, 美穂
Citation	日本学報. 2018, 37, p. 75-86
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/71623
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【研究ノート】

女たちのフィリピン

—1980年代日本の女性グループ「カラヤアン関西」をめぐる一考察—

中西　美穂

はじめに

カラヤアン関西は、1985年から1989年まで、京都と大阪を拠点に活動した小さな女性グループである。このグループは、フィリピンのフェミニストグループKALAYAANの日本で唯一の支部であった。1980年代から1990年代のはじめにかけて日本では、エンターティナーとして来日したフィリピンをはじめとする東南アジア出身の若い女性が“じゃぱゆきさん”と呼ばれ、不当な就労や性暴力の被害にあう事件がおこっていた。一方のフィリピンは、政治が大きく変化していく時代であり、1986年2月には民衆運動がマルコス独裁政権を排除し、初の女性大統領コラソン・アキノが就任した。そのような1980年代において日本の女たちは、フィリピンの女たちと、どのような関わりを持っていたのか。

女性史家の山崎朋子は『アジア女性交流史』の最終章において“じゃぱゆきさん”をとりあげ「日本の大衆世界において初めて浮上した〈アジア女性交流問題〉」であるとする。[山崎朋子 2012] しかし、その問題に、日本の女たちがどのように向きあったかへの言及はない。日本のメディアにおける否定的なフィリピン表象を主題とした研究においては、「男としての日本と女としてのフィリピン」というイメージが政治経済的な力関係の隠喩としてあらわれ [清水展 1996]、フィリピン女性が日本人男性との関係によって表象されている [東賢太郎 2015]、という指摘がある。これはメディアにおける日本女性の視点の不在がフィリピン女性の表象によってあきらかになる、と言い換えることもできるだろう。また在日フィリピン女性の社会活動家リサ・ゴウと在日コリアンの研究者である鄭暎惠の共著『私という旅—ジェンダーとレイシズムを超えて』においては、日本のフェミニズムの中にアジア女性へのレイシズムがあるとの言及がある。ただしそれらは1980年代の日本の女性とフィリピンの女性の交流を直接に論じるものではない。

本稿では、カラヤアン関西の事務局であった稲垣紀代が保管していた会員向け紙媒体「お知らせ」[1]と、関係者の手紙や書類を一次資料として用いる他、稲垣及びその周辺者へのインタビュー[2]も使用する。

まず第1章において稲垣の個人史とグループの設立、会員について整理して、カラヤア

ン関西を概観し、第2章で、カラヤアン関西の会員向け発行物「お知らせ」の形態や掲載されていた例会情報やトピックをもとに会員たちがどのようにカラヤアン関西と関わっていたのかを考察する。これらを通してカラヤアン関西の女たちがどのようにフィリピンの女たちと関わっていたのか、その一端をあきらかにしたい。

1. 稲垣紀代と「カラヤアン関西」

（1）英語教師・稲垣紀代のフィリピンとの出会い

日本の地方都市の小さな女性グループが、フィリピンのフェミニストグループの唯一の日本支部として立ち上がるには、フィリピン留学の経験があり、京都で英語教師をしていた稲垣紀代の存在が欠かせない。稲垣は1940年、島根県の益田に生まれた。島根は韓国に近かったこともあり、子どもの頃から外国を身近に感じていたという。実家は日蓮宗であったが、近所のキリスト教会のクリスマス会に参加する機会もあり，キリスト教も身近に感じていたという。1958年に神戸外国語大学英文学科に入学し神戸市長田区に暮らした。卒業後は島根県の中学校，大阪の私立女子高校の英語教師として働く。1967年にイーストウエストセンターの奨学金を獲得しハワイに留学する。横浜からハワイに向かう船上で同センターの留学生向けプログラムを受けた。同年代のアジアの人々との交流がとても楽しかったという。現地でのサマーセッションを経てハワイ大学大学院で修士号TESLを取得した。在学中に出会ったフィリピンからの留学生には、英語論文のタイプを手伝ってもらったこと、皆で歌う時にピアノの伴奏をしていたことなどの良い印象がある。その後１年間は大学のTAや小中学校の臨時日本語教員としてハワイに残った。稲垣がハワイにいた1960年代後半は、ベトナム戦争の時代である。大学では反戦運動があり、稲垣もシットインやティーチインなどに参加した。この時期、ハワイに留学していた台湾の学生が日本経由で帰国する際、強制送還され投獄される事件がおこった[3]。この留学生の救援運動への参加が「政治的なこと」に関わりはじめた一つの機会であったという。同じ頃、ハワイ大学で理不尽な非常勤講師解雇が起こる。その解雇に対する闘い方を同僚たちとともに学ぶ中で「デモクラシーのいろは」も学んだという。その後、ハワイで働いたお金を持って[4]海外に暮らす友人たちを訪ねながら、東回りで世界一周旅行をして1970年8月頃に日本に帰国した。その旅行ではフィリピンに立ち寄っていない。

同年10月より京都のYMCAで英語教師として採用された稲垣は在職中の1974年に「アジア人会議」に参加し、そこで同会議の参加者として来日していたフィリピンのシスターに出会う。ここで稲垣は、初めてフィリピンを意識した。翌1975年、アジアの運動を学ぶツアーに参加した帰路に、ハワイ留学の同期で研究者の寺見元恵が住むフィリピン

に立ち寄った。そこでシスターたちに再会し、現地の暮らしに触れ「フィリピンを大好き」になったという。ちょうど日本での仕事に行き詰まりを感じていたこともあり、1978年にYMCAを退職しフィリピン大学大学院でコミュニティデベロップメントを学ぶためにフィリピンに渡った。経済的な理由で勉強を続けられず修士論文は書かなかったが、大学院在学中の1979年と帰国後の1982年に、日本のウーマン・リブの運動家等を対象とした、フィリピンの劇団PETAのワークショッププログラムを企画し、日本の女たちをフィリピンにつなげる活動をはじめた。また、日本からの幾つかのエクスポージャートリップのアレンジにも関わった。当時、日本女性がフィリピンに行くことはとても珍しく稲垣が日本に帰国した際、取材依頼があった。その一つ「反公害ひろば通信」のインタビューにおいて稲垣は「これから、日本の女達の状況を、第三世界の人達の生活を通して考えていこうというのが私の課題」と述べている（1980年12月30日）。

稲垣は、この言葉の通り、京都精華大学短期大学部英文科の非常勤講師として英語を教えつつ、カラヤアン関西を立ち上げる。カラヤアン関西活動中の1988年11月に稲垣は同非常勤講師の解雇を通告され、1989年１月から1990年12月まで解雇の白紙撤回を求めて労働争議をおこした。これは近年問題となっている大学非常勤講師の雇い止め反対運動のさきがけともいえる。その後、四国学院大学の教員となり関西を離れた稲垣は、テレビドラマでのフィリピン女性の差別的な描かれ方に抗議する「メディアと人権を考える会」を吉田和子と主宰するなど、フィリピン女性たちと関わる活動を展開しつづける。同時代に京都を拠点としたフィリピン研究会[5]では、主に稲垣は、来日するフィリピンの活動家らの窓口役として参加した。東京を拠点とする「アジアの女たちの会」には、会員となり機関誌を購読し東京の連帯行動に何度か参加したものの、「東京だったし、具体的な行動にはほとんど関係していない」と述べている。稲垣は四国学院大学での教員業の傍ら、母親の介護と看取りを行い、同大定年退職後は京都に戻った。現在は英語力とツイッターを活用して女性の地位向上、反性暴力、反原発、環境保護、憲法改悪反対など、リベラルな発言を個人の立場で発信している。

（2）「カラヤアン関西」のはじまり

カラヤアン関西はフィリピンのフェミニストグループKALAYAAN[6]の唯一の日本支部である。フィリピンのフェミニズムは1970年代初期の反マルコス運動の中で生まれた［リサ・ゴウ 1999、キャロリン・ソブリチャ 2012］。女たちは女性の問題を焦点化するため、反マルコス運動から離脱し、女性運動の組織「マキバカMAKIBAKA」を結成した。1980年代は「女性問題を運動の争点にすることへの批判的な見方に対する挑戦」という課題を持つ、いくつかのフェミニストグループ[7]が誕生した。そのグループの一つが「カ

ラヤアンKALAYAAN」である。1980年代半ばには女性団体の連合体として「ガブリエラGABRIERA」が誕生するとともに、当事者グループとして都市貧困層の女性たちが中心となった「カバパKaBaPa」も活動をはじめる。このように1980年代のフィリピンのフェミニズム運動は、「地域的な広がりをみせただけでなく組織的に発展」した。［ソブリチャ 2012］

カラヤアン関西は、フィリピンのKALAYAANの設立メンバーの一人であるエストレリア・コンソラシオンと稲垣らの出会いで発会した。コンソラシオンは、フィリピン大学デリマン校が発行する新聞「デリマンレビュー」の記者として、1984年10月より5ヶ月間、上智大学のソーシャルジャスティス研究所に「日本の社会とアジアに対する文化影響」を調査するために招聘[8]され来日した。稲垣の記憶では、カトリック教会のシスターより、コンソラシオンの関西取材のコーディネート[9]を依頼されたことが、知り合う契機になったという。コンソラシオンは来阪時、「なぜ、じゃぱゆきさん」と題された新聞のインタビュー記事において「東南アジアからの出稼ぎ女性たちがセックス産業で搾取されている。それによって日本人自身も何かを失いつつあるのだということに気づいて欲しいと思います」（1985年1月19日）とコメントしている。

一方、コンソラシオンとの出会いによって誕生したカラヤアン関西は、自主企画したコンサートチラシに、自分たちの活動を「フィリピンの女性（男性メンバーもいます）と同じ目的で草の根レベルのつながりをもち、日本の女の状況を変える中でお互いに支えあうことをめざしています。私たち日本人がフェミニストとしてのびやかに生きられる社会は、フィリピンの女たちが、ひいては全ての国の女と男がのびやかに生きられる社会のはずです。そのために何か一緒にできるでしょうか」と書いている（1985年12月15日）。カラヤアン関西は、自分たちの活動の目的を一方的な支援ではなく「お互いを支え合うこと」としていたのである。

（3）カラヤアン関西の会員

カラヤアン関西にはどのような人々が何名参加していたのだろうか。稲垣のもとに残っていた複数の名簿[10]をあわせ、職業や住所を一覧にした。**【表1、2】**

42名の名前が確認できたが、全名簿に記載されているのは23名である。男性の名前と考えられる4名は、その23名には入らない。これらのことからカラヤアン関西は、関西に住む教員や主婦、会社員である女性たち23名が中心となったグループであったことがわかる。

会員の一人で、現在、高校の英語教員をする前田明子は1986年1月より約1年間フィリピンに留学し、KALAYAANのメンバーの家に滞在し、同年2月のフィリピン民衆に

【表１】職業

職　業	人数
教員	10（7）
主婦	6（3）
市役所職員	3（2）
学生	3（1）
翻訳家、ジャーナリスト兼翻訳家、ジャーナリスト、テレビ制作、	5（2）
旅行会社	1（1）
郵便局員	1（1）
会社員	3（3）
インテリアデザイナー、アートディレクター	2（2）
表示なし	8（1）

【表2】住所

住　所	人数
大阪府	16（9）
京都府	11（9）
東京都	4（3）
フィリピン	3（0）
奈良県	1（0）
兵庫県	1（0）
神奈川県	1（1）
埼玉県	1（1）
アメリカ	1（0）
表示なし	3（0）

表1、2ともに　人数の（　）内は全名簿に記載がある人数。2017年、中西作成

よるピープルパワー革命を目撃した。前田以外にもイギリス、フィリピンなど「お知らせ」には海外経験のある会員が登場する。郵便局員の宮前ハト子は毎月の例会を休むことが多かったが、「キヨさん［筆者注：稲垣のこと］とたまに電話で話したり、送ってもらったニュースレターを読んだりの参加」[11]をしていた。宮前はカラヤアン関西で取り組んだフィリピンKALAYAAN発行の英字雑誌「Bai」の和訳冊子を現在も大切に保管しており、カラヤアン関西の活動は自分の人生にとって重要だったと考えている。

コンソラシオン以外にカラヤン関西は、フィリピン女性と関わりがあったのか。「お知らせ」には「カラヤアンの議長オーロラさん」（1987年4月18日、1988年6月5日）「とびいりのリズさん（Center for Women's Resource 勤務でガブリエラ所属）」（1987年6月5日、同年12月頃）の来日記録や、KALAYAAN事務局のフロー・カアグサンの手紙和訳（1985年10月15日）、そして「シンシア・ノグラレス・ルンベラさんをまねいて」（1987年7月25日、同年9月5日）やシスター・アニー（1987年10月25日、同年11月3日）の講演会情報が掲載されており、フィリピンKALAYAANに限らずフィリピンの数名の女性との関わりがあったといえる。フィリピン女性以外の外国人としてはタイ女性の「モーさん」の集会情報（1986年11月23日）、イギリス留学した会員の友人「バーバラさん」（1986年6月20日）や、「タイのフェミニスト・ヴィラダーさんとつれあいのチャラチャイさん」（1988年10月14日）が来訪者として「お知らせ」に登場する。会員名簿には日本の大学教員の肩書きを持つ外国人の名前も数名ある。このようにカラヤアン関西はフィリピン以外にタイなどの外国の女性たちとも関わりがあった。

2. カラヤアン関西の「お知らせ」

（1）例会の日時と場所、「お知らせ」の形態からわかること

「お知らせ」には正式な名称がなく発行日が記されていないものもある。しかし、ほぼ全てに次回例会の開催日時と場所が書かれており、その日時によって時系列に整理することができる。現存しているもので一番古い「お知らせ」は、1985年5月15日の例会を報告し、同月30日の例会を知らせるものであり同月下旬に発行されたものであろう。最新の「お知らせ」の発行日は1989年4月23日である。約4年間にわたって発行されていたといえる。ほぼ全号に稲垣の名前が記されており、連絡先はいずれも稲垣の自宅となっている。大きさはB6～A3サイズ片面の一枚物であり、折りたためば定形郵便物で送付できる範囲内である。紙面はモノクロであり、鉛筆やペンによる手書きで横書きの日本語を中心に、英語や日本語の手紙、新聞や雑誌記事などの切り抜き、領収書などが切り貼りされている。一枚ものであり、A3サイズまでのモノクロであることから、簡易コピー機を使って印刷しやすい形態であるといえる。

「お知らせ」の例会日時は、火、水、木、金曜日の18:00~か18:30~といった平日の夕方からか、日曜日の12:30~16:40や4~6pmなど休日の午後であり、平日の昼間に仕事を持つ会員が集まることを前提にした例会であったようだ。また会場は大阪のサンプラザ市民センター、枚方市職員会館、大阪神学院、高槻市民会館か、京都の長岡産業文化会館のいずれかであり、市民が活用できる公立施設かキリスト教施設である。

（2）フィリピン女性との関わり

毎回の「お知らせ」には長い文章ではなく短い文章がいくつも書かれていた。ここではその短い文章の一つ一つをトピックと呼ぶ。このトピックの中には長期にわたって言及されるテーマもある。例えば1986年1月18日に登場し、その後「A問題」[12]と記されるカラヤアン関西メンバーの一人が被害者となった「強姦」である。事件の詳細を記したものは残っていないが、「お知らせ」の記述をたどると「6月例会は「強姦」に対する私たち女の意識の違いを少し話しあうことができ」（1986年7月）とあり、会員間で意見交換をしたことがうかがえる。[13]その後、加害者男性Aと直接交渉をするが、充分な反省が得られなかったことなどの報告がなされ、同年12月12日、同25日合併号には「運動の中における「性権力の行使」」であり、Aにそれを説明しても理解してもらえず解決できない」「この自分との対決を通して、私たちは、フィリピンの女性と連なる道を探っていけるとしたら、樋口さんのいうように「勉強」になるし、カラヤアンのメンバーとしてお互いにsupportしながら、共通の理解を求めていける」と記され、以降「お知らせ」では言及されない。

ここでの「お互いのsupport」とは、後に述べるように、関西カラヤアンの会員間のみならずフィリピンKALAYAANのメンバーの女たちとの関わり方であろう。具体的にどのような関わりであったのか。稲垣の筆跡ではないA4サイズの手書き文コピー（1987年4月）には「フィリピンの出稼ぎ労働者がエイズであると誤報が流され氏名だけでなく顔写真まで報道」[14]された事件について、フィリピンKALAYAANのメンバーより「あんたたちは何をしているの」と言われ、冗談めかして「私は日本でいくらでうれるかな、あっせんしてくれる？」と嫌味を言われたとある。それに対して「どうにかできるものではないけど、日本の私たちが実態もよく知らないということが残念」としている。この直後に発行された「お知らせ」（1987年4月18日）のトピック「話し合うこと」に「a.エイズとセックス産業、b.フィリピンからの花嫁、c.フィリピン研修旅行について」とある。つまり「お知らせ」にはあらわれないが、フィリピンの女たちとの遠慮のないやりとりがあり、フィリピンにかかわる日本の事件から、性産業や、フィリピンから日本の男性に嫁いでくる「花嫁」についての勉強会と、フィリピンの現地を体験する研修旅行が計画されたのである。

もう一つ長く続くトピックに、カラヤアン関西の発会のきっかけとなったエストレリア・コンソラシオンの「闘病」がある。乳がんのサバイバーであったコンソラシオンの「病状深刻」（1987年4月18日）にはじまり、闘病基金、抗がん剤治療、会員が渡比し看病、闘病支援カレンダーという話題が「お知らせ」の最終号（1989年4月23日）まで毎号に記される。コンソラシオンは同年5月30日に永眠した[15]。それ以降「お知らせ」は発行されていない。カラヤアン関西が正式に休会や解散をした記録はないが、実質的にここで活動が停止したようだ。一人のフィリピン女性の闘病に日本から支え寄り添うことも、カラヤアン関西におけるフィリピン女性との関わりであったといえる。

（3）コラージュ的な紙面

「お知らせ」には、手書きのトピックだけでなくチラシや記事を切り貼りしたものが少なくない。それは、25紙のうち15紙にみられる。つまり「お知らせ」に異なる文体や文字やテーマが共存しており、まるで美術におけるコラージュ作品のようでもある。ここではコラージュの要素がもっとも強くでている「お知らせ」から、どのようなものが一枚に共存していたのかの一例を示す**【図1】**。

A3サイズの紙面には、手書き文章や、記事や領収書のコピーが縦横に切り貼りされている。詳細を見て行くために4つに分割すると、①左半分の手書き文、②中央の領収書等のコピー、③右半分の手書き文、④下部の記事となる。

1986年12月25日付けの①は主に12月の例会報告であり、クリスマスカードをフィリピンのメンバーに書いたこと、来年の会費とフィリピンへのお金の渡し方、「Bai」の翻訳

Kalayaan News : Dec. 25. '86
Wishing you a joyous Christmas & a wonderful New Year!

《カラヤアン。緊急お知らせ》〈12月12日 '86〉

韓国政治囚 徐兄弟救援にあなたの力を！獄中16度目の冬を迎える徐兄弟に自由を！

【図1】カラヤアン関西「お知らせ」1986年12月12日・25日合併号

作業の経過、強姦事件「A問題」の経過報告、来年の「女のフェスティバル」[16]にどう参加するのか等が書かれている。続いて次回の例会報告、「マキさん」の帰京歓迎会を行うとの連絡もある。右上の「PS」は②の領収証の説明であり、22万4834円を日本のネグロス・キャンペーンに送ったと記されている。②の部分の領収書の但し書きには「10月25日長岡におけるバザーによるもの」とあり、ネグロス・キャンペーンからの礼状も貼付けてある。③の部分は《カラヤアンの緊急のお知らせ》とあり1986年12月12日付である。会計係より「懐のあったかいうちに今年（又は来年）の会費をおさめて下さーい！！半期1500円はフィリピンに送ります。返信用（切手・住所付）封筒もよろしく」とある。それ以外の大半は、三里塚で闘う女性を主人公にしたドキュメンタリー映画「草とり草紙」の上映会計画会議に問題のAが参加したことや、その上映会にカラヤアン関西の会員が関わっていること、その会員の母親の手術の成功が記されている。最下部は次の例会の日時と場所、そしてフィリピンに出発する「広瀬さん」の送別会も兼ねることが記されている。

一番下にある④は「韓国政治囚徐兄弟救援にあなたの力を！」と呼びかける記事コピー

である。「ここから下は私の個人的なお願いです」と稲垣の文責を示す「（紀）」がある。

このようにカラヤアン関西の「お知らせ」には、テーマを「フィリピンの女」に限定せずに、女性やアジアに関わる活動情報がコラージュ的に掲載されていた。

まとめ

カラヤアン関西は、関西に住む教員や主婦、会社員である女性たち23名が中心となったグループであった。このグループはフィリピンのフェミニストグループKALAYAANの設立メンバーの一人エストレリア・コンソラシオンが、英語教師・稲垣紀代を介して1985年1月に来阪したことを機に発会し、1989年5月30日のコンソラシオンの永眠とともに活動を休止した。グループでは会員向けの紙媒体「お知らせ」を稲垣が中心となり発行し、例会情報や会員で共有するトピックを掲載していた。「お知らせ」は簡易コピーや定形郵便物に適した形態であり、紙面はトピックや手紙や記事、領収証のコピーが切り貼りされたコラージュ的なものもあった。「お知らせ」からは、フィリピンKLAYAANの関係者に限らないフィリピン女性数名やタイをはじめとする外国人女性との関わりを持っていたことが、うかがえた。さらには、カラヤアン関西の会員にかかわる「強姦」など、直接フィリピンに関わらない話題も長期にわたってトピックに取りあげられていた。また「お知らせ」にはあらわれないが、フィリピンの女たちとの直接のやりとりがあり、そこから例会で「話し合うこと」が決められることもあった。例えば1987年4月17日の「お知らせ」に掲載された「エイズとセックス産業」や「フィリピンからの花嫁」など、日本の女性に無関係とはいえないテーマである。つまり1980年代の日本におけるフィリピン女性が直面していた問題を通して、日本の女性にも深い関わりがある問題を認識する「話し合い」がカラヤアン関西において行われていたということである。また「強姦」や「闘病」を同一視することはできないが、「お知らせ」のトピックとして長期にわたり登場するこれらのテーマは、双方とも女性身体に関わるものである。カラヤアン関西のメンバーたちは女性身体に関わる問題にフィリピンの女性たちとの交流の中で向き合おうとしていた。

歴史家の鹿野政直は、1970年代のウーマン・リブの活動が女性の主体確立を目指し、その主体確立の過程で、先の戦争の加担者としての意識を女性に芽生えさせ、それがアジアを植民化し占領した大日本帝国という加害者への共犯としての意識を生んだと述べている。それに続く1980年代のカラヤアン関西の女たちは、フィリピンの女たちとの関わりを通して、日本の女として、それまで考える機会を持つことが少なかった、社会的課題について、女性の身体に向き合うことも含んだ学びの場を作ろうとしていた、ということができるのではないだろうか。そこでは日本とフィリピンの二者のみの関係ではなく、タイ

などの東南アジア女性とのかかわりや、韓国政治囚救援という東アジアの政治的課題、三里塚の女性という日本の政治運動におけるジェンダーへの視点も含んでいた。それは加担者や加害者といった単純な図式で、日本の女がアジアのフィリピンの女らと対立軸にあったということとは異なっていた。むしろ女性身体に関わる問題を通して、フィリピンの女たちと、自分たちの問題を重ね合わせるような活動を試みていた。ただし完全に一致する重なりではなく、「お知らせ」紙面コラージュのように異なる要素が切り貼りされてはじめて形となり、重なり合えていた。

参考文献：

論文・書籍

東賢太郎 2010「表象・イメージ・現実――在・滞日フィリピン人女性表象の変換から」『宮崎公立大学人文学部紀要』第17巻　第1号
内海愛子・松井やより 編 1988『アジアから来た出稼ぎ労働者たち』明石書店
エリザベス・ウィ・エヴィオータ（佐竹眞明、稲垣紀代 訳）2000『ジェンダーの政治経済学――フィリピンにおける女性の性的分業』明石書店
大橋成子 2005『ネグロス・マイラブ』めこん
小田実 編 1976『アジアを考える　アジア人会議の全記録』潮新書
鹿野政直 2004『現代日本女性史　フェミニズムを軸として』有斐閣
リサ・ゴウ＋鄭暎惠 1999『私という旅――ジェンダーとレイシズムを超えて』青土社
清水 展1996「日本におけるフィリピン・イメージ考え」『比較社会文化』第２巻
クマーリ・ジャヤワルダネ（中村平治 監修）2006『近代アジアのフェミニズムとナショナリズム』新水社
キャロリン・ソブリチャ（館かおる・徐阿貴 訳）2012『フィリピンにおける女性の人権尊重とジェンダー平等』お茶の水書房
松井やより1974「私はなぜキーセン観光に反対するのか　―経済侵略と性侵略の構造を暴く―」『女・エロス』No.2, 社会評論社, 1993『アジアの開発観光と日本』草風館, 2000『グローバル化と女性への暴力　市場から戦場まで』インパクト出版会
山崎朋子1995『アジア女性交流史　明治・大正期篇』筑摩書房, 2008『サンダカン八番娼館』文春文庫, 2012『アジア女性交流史　昭和篇』岩波書店
山谷 哲夫 1985『じゃぱゆきさん』情報センター出版局

雑誌

あいだ工房 編1980『日本の女と‥‥フィリピンの女たちと‥‥』
アジアの女たちの会 編1977-1992『アジアと女性解放』
女のフェスティバル準備会 編1997『あなたがつくる女のフェスティバル10年の記録』
カラヤアン関西 編1985-1989『Bai タガログ語で女性「バイ」』
日本カトリック正義と平和協議会フィリピン委員会 編著1983『マリア・クララはいま――日本人にとってのフィリピン』
非常勤教員の使い捨てを許さない女たちの会 編1991『「Bakit？（なぜ）と言い続けて」――精華大学争

議報告集』
フィリピン問題連絡会議 編 1981『フィリピンバナナと私たち』
メディアと人権を考える会1993『ドラマ「フィリピーナを愛した男たち」をめぐって　テレビメディアが問われ　私たちが問われている　ドラマが映す差別と偏見、映像はフィリピンとフィリピン人をどう描いたか』
『反公害ひろば通信』号外第４号　1980年12月30日

新聞

読売新聞「なぜ“じゃぱゆきさん”」1985年1月19日
京都新聞「女のフェスティバル　女性の運動の現状と展望（渡辺和子）」1986年3月30日
読売新聞「日比女性が連帯カレンダー」1987年12月7日

注

1　カラヤアン関西が発行していた紙媒体には正式な名称がなく手書きの題字は「カラヤアン関西例会のお知らせ」「カラヤアン国際通信」「Kalayaan News」「カラヤアン関西のお知らせ」と様々であった。ここでは全て「お知らせ」とする。

2　筆者は2014年4月頃より不定期に稲垣を訪問した際の会話などをフィールドノートとして記録した。前田明美には2014年5月17日，宮前ハト子には同年7月13日に，いずれも京都市内の稲垣の自宅でインタビューを行い筆記にて記録した。稲垣には2017年3月26日に集中的にインタビューを行い筆記とともに音声録音を行った。

3　陳玉璽は，日本滞在中の1968年2月に法務省入館管理局に呼び出され強制送還された。ハワイ大学や法政大学を中心に「陳玉璽君を救う運動」がおこった。（朝日新聞1968年7月17日）

4　稲垣は，ハワイ滞在中に働き，約5000ドルの給金を得た。当時の固定レートが360円であったため，一人暮らしの母親をハワイに招き，世界一周旅行する費用に充分であったという。

5　『フィリピンバナナと私たち』には「フィリピンに留学しておられた稲垣紀代さんが帰国したところであった」［フィリピン問題連絡会編1981：66］とある。

6　カラヤーンKALAYAAN（Movement of Women for Freedom自由のための女性運動）の設立は1983年。フィリピン大学教授のキャロリン・ソブリチャ（2006年にお茶の水大学ジェンダー研究センター外国人客員教授として来日）もKALAYAAN設立メンバーの一人［ソブリチャ2012：15］

7　ソブリチャはKALAYAANの他に、1981年設立のピリピナPILIPINA（The Philippine Women's Movement フィリピン女性運動）をあげている。［同前：15］

8　エストレリア・コンソラシオンに関する「Letter of Guarantee」として，日付「September 28, 1983」，宛先「His Excellency Ambassador Yoshio Okawa Embassy of Japan」，差出人「Fr. Anselmo Mataix, SJ Director, Institute for the study of social Justice, Sophia University」のコピーが残っている

9　稲垣からの1984年12月19日付英文手紙には，1985年１月13日に京都に到着し同月21日に東京に戻るまで，フェミニストグループや在日フィリピン人たちとの会合，釜ヶ崎や工場見学などのスケジュールと，滞在半ばに稲垣の自宅に宿泊することが書かれている。

10　正式な会員名簿は残っていない。稲垣の手書きによる関係者の名前が書かれた和文４種類と英文１種類の合計5種類がある。そのうち日付があるものは1988年8月31日の和文のみである。稲垣

によるとそれらの名簿は会費納入や例会出欠の記録に使っていたとのことである。

11　1986年5月17日付の宮前による「カラヤアン関西の皆さんへ」より。

12　実際にAと記されていないが，ここでは仮名のAとする。

13　2017年10月29日に筆者と原稿確認を行った際,稲垣は，この強姦問題についての話し合いで，自分の性生活を思い出すので不快だというメンバーの意見があったと当時を振り返った。

14　1986年12月7日号「サンデー毎日」において「フィリピンから来日してナイトクラブで働いていた女性をエイズ患者と決めつける間違った記事が掲載」された。これに対してナイトクラブ経営者と外人タレントあっせん業社は損害賠償を求める訴えを起こしている。（毎日新聞1987年3月6日）

15　フィリピンKALAYAANのAida F.Santosによる追悼記事「Death of a friend」（マニラ・タイムズ1989年6月４日）の記事コピーと邦訳を稲垣が保管していた。

16 「女のフェスティバル」とは1986年より10年間，毎年3月に京都市内で行われていた，国際婦人デーにちなんだ女たちによる女たちのための手づくりイベント。